



私が、大日本コンサルタ
ントに入社したのは、昭和
60年で、それ以来今日まで
25年間、橋に関わる仕事を
してきました。

私の橋歴は、大阪からス
タートしました。そこで、
初めて設計した橋は、3徑
間連続鉄板橋で、供用が暫定
系から完成系に変化する3
段階施工となるものでし
た。3種類の格子解析で断
面力を算出し、断面を決定
しなければならず、剛度、
鋼重を収束させるのに非常
に時間を要しました。苦労
して決定した断面を上司に

見せると、「逆テーパーに
なっている。」「使用す
る板厚を揃えろ。」などと
言われ、何度もやり直した
ことは未だに忘れません。
それから、多くの新設橋

地図に残す仕事

大日本コンサルタント(株)

保全・診断室 室長 原田 政彦

担当した中路式ニールセン
ローゼ橋の松野大橋は印象
に残る仕事でした。吊材の
形式、アーチリブと補剛桁
の交差部の結合条件、支承
条件などによって、部材の
断面力が大きく変化するこ
とから、最適構造を決定す
るため多くの検討を行いま
した。その経験で構造検討
とアーチ橋が好きになった
ような気がします。

平成2年からの2年間、
阪神高速道路公団に出向し
ました。そこで、大阪市内
と関西空港を結ぶ湾岸線の
橋梁の設計に携わりまし
た。発注者側の立場で、設
計協議、原寸検査、仮組立
検査にも同席させて頂き、
建設コンサルタントではで
きな貴重な経験をしまし
た。

被災橋梁の復旧設計に対
して、当時の耐震補強設計は
地味なイメージの仕事でし
た。公団の担当者の堀松正
芳さんからは、「被災した
橋の数より、被災していな
い補強が必要な橋が圧倒的
に多いから、市場は大き
ぞ。」と言われて頑張った
記憶があります。この業務
のおかげで耐震に興味を持
ち、今日まで

たくさんの耐
震関係の仕事
に携わること
ができました

平成7年に発生した兵庫
県南部地震では、倒壊した
国道43号の岩屋高架橋の復
旧検討を担当しました。そ
の現地調査では、橋の倒壊
状況に驚くとともに、神戸
市内の状況に自然災害の恐
ろしさを感じました。

その後、阪神高速道路公
団のRC橋脚耐震補強設計
要領の作成を担当すること
になりました。注目される
きく違つことが、ある意味

衝撃的であったし、実学動
を把握することの重要さを
学びました。また、恩師の
金沢大学教授梶川康男先生
に実学動を把握するための
計測、解析についてアドバ
スを頂くとともに、学位取
得の指導も賜りました。
その後も疲労、腐食など
で損傷したトラス橋、アー
チ橋、桁橋を担当してくま
りしたが、それらを担当す
る度に橋は適切に維持管理を
しないと後世に残せないと
感じてきました。

現在は、担当する業務の
半分以上が橋梁の維持管理
に関するものとなっております。
入社当時は、ある会社
の広告コピーにあるように
「地図に残る仕事」と思っ
ていたのですが、現在は「地
図に(良い橋を)残す仕事」
と違って仕事に取り組んで
います。

次は新天門橋の設計でお
世話になった熊本県土木部
の中山義晴さんにバトンをお
渡しします。